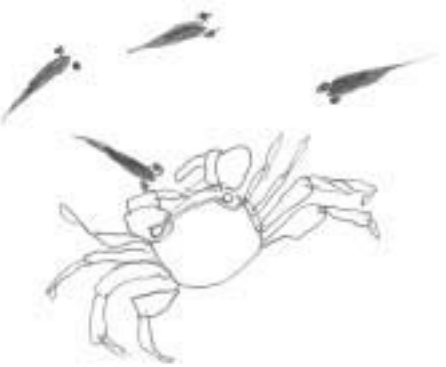


子どもが見えない大人たちへ

阿部 夏丸



子どもがダメになるっ。

「この前テレビを見ていたら偉そうなオヤジが「そのままじゃ子どもがダメになる。日本の未来が危つい」と力説していた。オヤジが言うには、文科科学省が「ゆとり」の教育を打ち上げてからというものの、授業時間が激減し、教科書も薄くなり、子どもたちの学力が低下したらしい。」

「国の子どもに比べて学力の平均点が下がっているんですよ。危険な現状です。」



僕は苦笑した。そうやって学力と平均点でだけしか子どもを測れない大人が日本をダメにしたのだよと。第一、ゆとりの教育を語るのに、3年で結果を求めるなんて何とゆとりのないことか。少なくとも10年は待たなくてはゆとりを語る資格もないだろう。それに、危険だというのが何が危険なの？ 学力が下がることは危険なことなのか？ 学力低下は承知の上で、もっと大切なものがあると信じて、ゆとりの教育は始まったはずなのに。」

勉強嫌いで学力のない僕には、偉そうな

オヤジの言うことがさっぱり分からなかった。ただ、感じたことは、危険や不安をあって商品を通して、この靈感商法まがいの「こが」が、M&Mを通して日本にまはびびっているのだなと。こが、ただだから子どもを語る時、皆がマイナス面ばかりを探し、騒ぎ立てる。子どもたちの長所など見向きもせず。」

「子ども、子ども、ポソンの子ども。個性がない、覇気がない、学力がない。このままじゃ、日本の未来が危ないっていうじゃない。」

でも、あなた、そんな子どもを育てたのはあなたたち自身ですから。残念。」

去年、流行った波田陽区を真似るなら、こがなとこがだろ。そういうえば、こがなのも流行ったね。

「ダメなのは子どもじゃなくて大人だ。マチガイナイ！」

見捨てられちゃった大人

年間、子どもに向けての講演会や川遊び実践を20回以上しているのだが、その中で毎回こんなことを質問する。

「早く大人になりたい子。手を挙げて……ほとんど手が挙がらない。小学生で20%、中学生で0%というのが現状。それほど大人たちは人気がない。もう、見捨てられちゃってる感じがする。」

「みんな、何で大人になりたくないの？」

「仕事で疲れるから」

「お金持ちになれないから」

「上司にこらわれるから」

親の愚痴をそのまま聞かされているような情けない気分になる。子どもが大人になりたくないという国は滅びると思っているので、僕は言う。

「お前の父ちゃんや母ちゃんにだまされているぞ。大人は楽しいんだから」

「……本当？」

「本当だよ。仕事して、本当は楽しいんだから。それに、大人になれば自由だ。夜中に車でも山にも行ける。そうする、クワガタやカブトムシが山ほど捕れるんだぞ。俺なんか大好きな川遊びをしに日本中行ってるし、アマゾン川へ行ったこともあるんだ。楽しいぞーっ。大人はお酒も飲めるし、大好きな子と結婚だってできる。お前たち、何もしないで子どもそのままでもいいの？ もつたいないな。」

「こんな他愛もない言葉で、何割かの子どもは、ひよっとして、大人は楽しいのかも」と考えてくれる。それほど、大人は楽しいぞ」と言い切る大人が周りにいないということか。子どもは正直だ。楽しくもない大人に、だれがなりたいたいと言つものか。

子どもの未来を心配する顔をして、自分の老後はかりを心配している大人たち。あ

なたたちは子どもにあなたたちの教育観を押しつける資格はありません。だってもう、見捨てられちゃっているのですから。」

大人の価値観と子どもの価値観

僕は釣りバカである。しかし、バカ釣り師ではない。この違いが分かるだろう。か釣りバカは度を越した釣り好きだが、バカ釣り師とはバカな釣りに興じる者たちである。バカな釣りとは、いわゆるゲームフィッシング。釣果だけを追い求め、対象となる魚しか見ない人々を、僕は「バカ釣り師」と呼ぶことにしている。

バカ釣り師はスタイルや情報にやたらとうるさい。高価な釣り道具を買いたい。釣れている川があると聞くと、すぐに出かけ釣れなければ、この川はダメだ」と川のせいにする。そして、バカ釣り師は、自分にとって価値のある魚しか見ようとしなず。対象外の魚が釣れると、不機嫌な顔をして「くそっ、外道か」と言う。そのくせ、釣りは「ロクンだ」とか、自然を愛しているとか言うのだから、始末に終えないのだ。

その点、釣りバカは気楽だ。目的の魚が釣れなくても、それを良しとして他の魚で満足できるから、魚種を差別しないから、何が釣れても喜ぶわけだ。魚が釣れなければザリガニだって釣るし、カエルだって釣つてしまつ。それに飽きれば竿を置き、川に入つて

遊んでしまつ。何しろバカであるから、人や格好など気にしない。釣りをするだけで、川にいてだけで満足できるのだから、いつも幸せというわけだ。

この両者の大きな違いは何か。それは、価値観である。スタイルや結果ばかりを気にする遊び方と、行為そのものを楽しむ遊び方。考えれば、これ、大人と子どもの価値観に似ているような気がする。

最近では、バスフィッシングやルアー釣りなど、子どもに多くの金を使わせる釣りがブームになってきた。正しくは商品売って大人がブームをつつたけど、あれを見てみると、よく分かる。ルアーを投げる子どもは、ほとんど苦虫を噛み潰したような顔をして笑わない。釣った魚にも触らない。フックだけを指先でつまんで、ポイ捨てのようなキヤッチ&リリース。大人の価値観やルールに縛られて、何だか悲しくなってくる。

その点、釣りバカ派の単純な川遊びはいよいよ、ミミズを触つては大はしゃぎをする。釣った魚は死ぬまで、何度か回す。最後は川に入っちゃおう。自分自身の価値観で遊ぶ子どもは、本当に生き生きといて、見ているだけで楽しくなってくる。

子どもの気持ちになんて分かってたまるか

僕の小説は、主人公がほとんど子ども。作家以外の活動は講演や川遊びのイベント

大人になれないうままに 成熟する若者たち

金原 瑞人



経済的な存在として子どもと大人の間に生まれてくる。それまでにあった子どもと大人の間の大きな川が若者層になつてしまつたとしてもいい。

テレビマンガで育つた団塊世代

ここで大変化が起る。つまり、昔と違って子どもから若者へなるとなく移つていく。若者から大人へなるとなく移つていく。うになつていくのだ。ここでは子ども若者・大人の各層を隔てているのは川ではなく浸透膜なのだ。ここでは、濃度の高いものつまりエネルギーや伝染力の強いものやポテンシャルの高いものは膜を通過して相互に作用する。具体的にいえば子どもが若者になるとき、必ずしも子ども文化を捨てる必要はなく、若者が大人になるときも同じ。さらに若者文化で可能性の高いものは子どもにも大人にも広がっていく。

マンガを例にとつて考えてみよう。いわゆる全共闘世代はTVマンガで育つた。いい。彼らが子ども頃の少年マンガは、ちやうど過渡期にあつた。それまで全盛だった『ぼくら』少年『少年画報』『冒険王』といった月刊マンガ雑誌が低迷していき、『少年マガジン』少年サンデー、1959年創刊といった週刊マンガ雑誌が台頭していく。この月刊誌から週刊誌への移行によつて、マンガは身軽にフレキシブルになつてい

し、それもすでに昔の話。やがて、電車の中、マンガを読んでいるのは中年だけ、という時代に入っていく。

ベトナム以降のマンガの50年間は、こんなふうなまとめることができる。ここで大きな役割を果たしたのが、若者だつた。

現代、このように若者が新しい文化を受容し、発展させていった例は数え上げればきりが無い。たとえば79年にTV放映が始まつた『アヌ』機動戦士ガンダム。80年代に子ども時代を過ごした世代は、これを若者になつても大人になつても引きずっていく。アヌからさらに映画マンガ小説ゲーム、フィギュアといった分野にまで広がっていく。子ども・大人の二層から子ども・若者・大人の三層になつたことによつて、若者が文化形成で果たす役割が驚異的に大きくなつた。かつて新しい文化をつくり上げ、育て守つていくのは大人の役割だつたが、その役割分担がダイナミックに変わったのだ。

文化を変質させた中産階級の台頭

しかし、ここでもうひとつ考えておかなければならぬことがある。それは、文化そのものの変質だ。かつて文化に携はることで、きるのは支配者、権力者であつた。美術も音楽も文学も、すべて金持ちのパトロンがついてこそ成立した。ところが近代に入つてか

『大人になれないうまま成熟するために』(洋泉社)に詳しく書いたが、世界で初めて1950年代のアメリカで、若者」が誕生し、それまでの「子ども大人」という二層構造が子ども若者大人」という三層構造になる。乱暴にしまえば、それまで子どもと大人の間に大きな川があつて、子どもが大人になるためには、子ども的なものを思い切って捨ててしまわなければなら

50年代アメリカで誕生した「若者」

『大人になれないうまま成熟するために』(洋泉社)に詳しく書いたが、世界で初めて1950年代のアメリカで、若者」が誕生し、それまでの「子ども大人」という二層構造が子ども若者大人」という三層構造になる。乱暴にしまえば、それまで子どもと大人の間に大きな川があつて、子どもが大人になるためには、子ども的なものを思い切って捨ててしまわなければなら

くのだが、それはさておき、こつこつとした活気のあるマンガ文化を享受した子どもたちは、中学高校に進んでも、いや、大学に進んでも、マンガを子ども文化として切り捨ててしまわなかつた。

そして60年代終わりから70年代の学生紛争のとき、彼らが自分たちのバイブルとして挙げたものの中に、『カムイ伝』『あしたのジョー』があつた。その一方に、羽仁五郎『都市の論理』、吉本隆明や埴谷雄高の著作があつた。考えてみれば、全共闘世代は前代未聞の芸当をやつてのけたわけだ。白土三平、梶原一騎、高森朝雄、ちばてつや、と、羽仁五郎、吉本隆明、埴谷雄高を同じ棚に並べてみせたのだ。つまり子ども文化と大人文化を見事にブレンドしてみせた。ついでに書いておく。『あしたのジョー』で力石徹が死んだとき、マンガ史上初めてのキャラクター葬儀が行われた。そのときの喪主が若者たちにカルト的な人気であつた寺山修司だ。寺山は『アヌ』版の主題歌の作詞もつてこい。

電車でマンガを読むのは中年だけ?

こつこつとマンガをのんびりに追つていく。当時の「こつこつ若者の力に呼吸する」かの『ガロ』が64年に、『COM』が67年に創刊されている。前者では白土三平、水木しげる、つげ義春、佐々木マキといった作

なかつた。子ども社会から大人社会に入るには、精神的な切り替えが必要だ。た始原的な人々の間で、子どもが大人になるためのかなり荒々しい儀式、イニシエーションが存在するのを見ても、それは明らかだ。

近代文明の洗礼を受けた国々でもそれは同じで、図書館などの例が分かりやすいかもしれない。小学校の頃、児童室に入りこみ、子どもたちはやがてそこを出て、一般室に入ります。驚くほどの差があつた。

ところが戦後の飛躍的な経済発展のもとに、まづアメリカで高校生、大学生の数が一気に増え、新たに若者という層が社会的家、後者では手塚治虫、石森章太郎、松本零士、坂口尚といった作家が中心となつて、マンガというジャンルの枠をどんどん広げていった。そしてそれまで子ども文化として子どものおもちゃとして語られていたマンガのステータスを一気に押し上げ、若者だけでなく、大人も十分に楽しめる文化にしてしまつた。その結果、当時のインテリ版『週刊朝日』ともいふべき朝日ジャーナルが、佐々木マキのマンガを載せて話題になつたり、つげ義春のマンガが一種の文芸作品であるかのように批評に取り上げられたりするようになる。また、『ガロ』で連載された林静一の『赤色エレジー』が評判になり、あがた森魚が『赤色エレジー』を歌つてこれがトピックス。『同棲』が流行語となり、『漫画アクション』に連載された上村一夫の『同棲時代』も同じくベストセラーになり、映画化される。また、『漫画アクション』といえば、67年に創刊されて以来、若者をターゲットにしたマンガづくりで注目を集めた『ルパン三世』『子連れ狼』『じゃりン子チエ』『嗚呼、花の心』『援団』などのトピックスを生む。

さらに全共闘世代は大人になつてもマンガという文化を引きずっていく。大人までが電車でマンガを読んでいる、という非難もなんのその。ついでには朝日新聞社の手塚賞までつづいて、いま、マンガをひとつの文化として権威化し、特権化してしまつた。しか



は画期的な発明で、その音楽に非常に大きな影響を与えている。

活字文化に変化をもたらす携帯

さて、さらに話を日本の現代にもつれてみよう。このころの最もおもしい現象は携帯電話だと思ふ。もちろんこれを発明し製作し販売しているのは大人だが、これを徹底的に使いこなし、利用して大きな文化をつくり出しているのが若者である。はい、つまりでもない。

携帯電話が流行し始めたとき、電車の中で携帯で話している若者は確かに耳障り、目障りで、大人たちの嫌悪を買ったが、すぐにメール機能が発達して、若者たちはすみやかにこれを利用して始めた。そしていま、車内で声を張り上げて携帯でしゃべっているのはおじさんたちのほうである。また、説明書なしで使える簡便な携帯をおじさんたちが使う一方、若者たちは新しい携帯を買ったたびに、分厚い説明書を夢中になつて読み、新しい機能を自分のものにしていく。

そういった若者たちが最近、携帯を使って享受し始めたのが、携帯小説だ。あんなもので小説が読めるか、という大人を尻目に、彼らはちゃんと読んでいる。本に比べれば画面の文字数も少なく、読みづらいのは確かだが、どこでも読める、暗い部屋で寝転

ら、これが大きく変わる。つまり近代ブルジョア（中産階級）が社会的政治的な美権を握るようになる。彼らが文化的な美権も握るようになっていく。その代表的なものが18世紀に誕生した小説だ。英語で novel というのは、新しいという意味だ。当時の中産階級は、自分たちが主人公の自分たちの生活を描いた文字を読みたかった。そういう要求から生まれたのが小説だ。もちろんそれは安価で自分たちに買えなくてはならない。このような形の文化が誕生するのは近代以降のことだ。

やがて20世紀に入って映画が誕生するが、それとはほぼ同じ頃、音楽もまた一般人の手に入るようになる。それを可能にしたのがレコードと蓄音機という、音楽の再生機器だ。これにラジオが加わって、さらに広く音楽を楽しむ環境が整ってくる。

こういった文化では、どれくらい多くの人々をバックにつけるかが問題になつてくる。そういった文化の変質も射程に入れて再び文化と若者の関係を考えていくと、フシキシルな感性を持った若者が、文化の受容者としても創造者としても活躍しやすい状況になってきたのがよくわかる。

たとえば、アメリカ50年代のロックンロール、R&B、リズム・アンド・ブルースと呼ばれていた黒人音楽が、一部の若者の心をとらへ、やがてPR&R（ロックンロール）と名を変えて、全米をそしてついには世界中をおおっていく。これについては、大人になれないまま成熟するために、詳しく書いたので、「ここではもう少し新しい例としてクラブ・ミュージックを挙げてみよう。

たとえば、ヒップホップ、トップホップというのは、ラップ、DJ、ブレイクダンス、グラフィティの4要素すべてを指す言葉だが、70年代半ばのニューヨークで原型ができる。音楽のほうでは、アフリカン・パンパータが10代のダンス・グループをつくったのが大きなきっかけになった。そして、ジャマイカからの移民であるクール・ハークなどのDJがブレイク・ビーツ2台のターンテーブルで同じ部分を繰り返しかけるテクニクなどを交えて、パーティーのダンスの音楽を担当するようになる。

たとえば、ハウス80年代初頭にシカゴハウスが流行するが、77年、すでにシカゴのゲイクラブ、ウエアハウスに、ニューヨークからフランク・ナックルズが呼ばれ、ニューヨークスタイルのDJブレイを披露し大成功を収める。2枚のレコードをかけながらダンスをリードした。

こういったラップ、ポップ、ハウスでもむしろいのは、安い中古のレコードとターンテーブルという、それまでの音楽再生機器を「楽器」として使い始めたことだろう。これもいつべき中国は簡体字になつてから、小説もマヤも横書きになつてしまつた。お隣韓国でも戦後、ハングルが使われるようになってからは横書きである。いま、縦書きが残っているのは日本と台湾くらいだろう。

もちろん、大勢に従ふ必要はまったくない。が、ここまで横書きが浸透してきた中で、縦書きを固守し続ける日本の出版社の保守性は、どう見てもおかし。もちろん日本人作家による横書き小説は、いくつか出ている。成功例としては、水村美苗の『私小説 from left to right』、福永信の『アフロハット前夜』などがある。があくまで例外中の例外だ。

ひと言断つておく、金原個人としては、縦書きの小説のほうが好き。やすいから、横書き運動など起つては、しくはないし、読み物＝縦書き、という因習に異を唱えつつも、いらないが、個人を一步離れて、周りをながめると、首をかしげざるをえない。横書きの読み物が出てくると、文字文化の可能性もまた広がるに違いない。もつたないなと思つてしまふのだ。

「老人としての第四層」

しかし、そんなおじさんの寝言をよそよそで、若者は携帯で横書きの小説を楽しみだした。もちろん以前から、ネットでの小説のやりとりはあつた。そして、「ちゃんねる」の評判だつた。『電車男』がベストセラーになつた。この本、縦書きに慣れたおじさんたちにはとても読みづらいと思ふ。だが、いまの若者にとっては、とても身近な表現形態なのだ。そして、彼らは必ずこの流れを引きつづけて大人になり、未来の若者に向かつて、いろんなものを発信し、いろんなものをつくり、いくに違いない。かつて子どもと大人はある意味、対立的な存在だつたが、子ども、若者、大人という構造になつた結果、すでにそういう対立はなくなつてしまつたのだから、そして蛇足ながら、さらに現代の日本においては、もうひとつの層が新たにできていく。つまり、子ども、若者、大人、老人という四層構造になっているのだ。そしてこの第四層は、全共闘世代がこれから参入することによつて、一気にふくれあがる。この層がこれからどう動いていくのか、そちらのほうも気になつてみようがない。

Mizuhiro Kanehara
1954年、岡山県生まれ。翻訳家、法政大学社会学部教授。エッセニック文学、マイノリティ文学、児童文学などが専門。ゼミからは古橋秀之、秋山瑞人、金原ひとみ（2003年芥川賞受賞）という3人の若手作家を輩出。ヤングアダルト作品を中心に、翻訳した作品は200点近くに及ぶ。著書は『大人になれないまま成熟するために』（洋泉社）主な訳書は『ホエール・トーク』（青山出版社）『木曜日に生まれた子ども』（河出書房新社）『青空のむこう』（求龍堂）など多数。ヤングアダルト向けの訳書を読むと、この人はきつと、大人にならないんだろなと納得してしまうほど、よどみを感じさせない。

世代像が向かないから 人生と向き合えない

保坂 和志



「世代」を持たない私の学年

まず最初に自分がどの世代なのかをどう決めたのだけじゃ……1956昭和31年の10月に生まれた私にとって、小学2年で東京オリンピックがあつて、中学2年で大阪万博があつて、大学に入ったときには学生運動は終わつていた。バブルのときには

30歳前後で職場で一番働くポジションについて、やたらと大事にされて礼儀も知らないバブル採用の新社員に「なんだ、こいつら」といつ気持ちは持つていた。

いまは世代論が流行つていなければならないけれど、私の学年はどの世代にも属していません。たぶん、私がかつた世代というものを持つていなかった。私が中学、高校の頃、世代というのは戦中派とか、焼け跡闇市とか、特別な体験や特徴を持つた人々を指す言葉だった。は

ずでのちに「団塊の世代」と呼ばれる。ベトナム世代に遅れること数年だった私の学年は何の世代にも属していません。そこで指していた「世代」は5歳から10歳の幅を持つた大雑把な区分けだったはずだ。いまでは嘘か本当か知らないが、「ウルトラセブン」を見た世代と「ウルトラマンレオ」を見た世代という風に細分化されている。そうだが、それは本来の世代論ではない。「全体として同質であるにもかかわらず、少しのことでは差異化したがる世代」というグループに括られるのではない。

ビートルズはすでに懐メロ・バンド

そんなことはともかく、自分たちには世代の名称がない。自分たちはどの世代にも属してない。どうのが私の学年の自己認識だ。「この認識が上下どの学年までのものなのか、確かなことはわからないし個人差もあるだろうが、私の学年（の周辺）はなんだか孤立している。それはネガティブな意識でなくかといって大威張りの意識でもないのだが、たとえばビートルズとの接し方において上下の世代から孤立している。

お姉さんかお兄さんかいる子が早熟な子でない限り、私の学年以下、近辺は省略（は中学2年から3年でポプス＝洋楽を聴きはじめるのが普通で、中学2年、70年の秋に私がラジオでポプスを聴くように

なつたとき、象徴的なのだがビートルズの最後のLP「曲である」LP「イン・ザ・パーク」がLP10に残つていて最後の週だった。60年代の終わりから70年代といつのはすべてにおいていまから思つてみてもなく回転・消長が速い時代で、解散したり引退したりしたミュージシャンはすぐに遠い存在になつていった。だからビートルズは団塊の世代のもので私には遠くほとんどの懐メロ・バンドのやうなものでした。

それにしても、シヤペリンがいて、ストーンズがいて、グラランド・ファンク・レイルロードがあるロックの時代であつて、クリームは解散してもオーラを放ち、ジミ・ヘンクとシャニス・ジョプリンだつて死んでもバリバリ現役だつたが、ビートルズなんてあんなにちよさいポプスは……という気分が支配的で、ポール・マッカートニーが大所所持で税関でつかまつて、外にファンが大勢集まつて、イニスタデイを合唱したといふコースを見たときも、「なんてタサイ」ことをするやつらだ」と思つて、ビートルズ世代＝団塊の世代を見ていた。

ところが、ちよと下の人々たちからまるで団塊の世代と同じようにビートルズからポプスに入り、ほかのバンドに行かずにそのままビートルズを聴き続けた人々たちが登場する。あるいは一方でもずっと先鋭的に、私の学年では同時代には聴いたこと

がなかった、ウルヴァット・アンダーグラウンドなんかを中学から聴いてしまつた人たちも登場した。

そこで何か時代が変わつたのだ。時代が減速して、同時代であることの価値が弱まつたといふことがひとつと、もうひとつは、日本が豊かになつて媒体が増え、日本で発売されるレベルが増え、それに伴つて批評も増えて、ロックに歴史が生まれ、たといふことなのだと思う。私は、グラランド・ファンク・レイルロードといふ名前を出したが、歴史性でないといふことでロックを聴くといふことは、10年経つたら忘れ去られるものにある時期、熱中するといふことであつて、忘れ去られたものには、ウルヴァット・アンダーグラウンドのように瀕して確認される同時代性といふ価値もなく、熱中した自分たちの時間や行為はただ宙に浮くことになる。

「懐メロ」は懐メロの世代から孤立

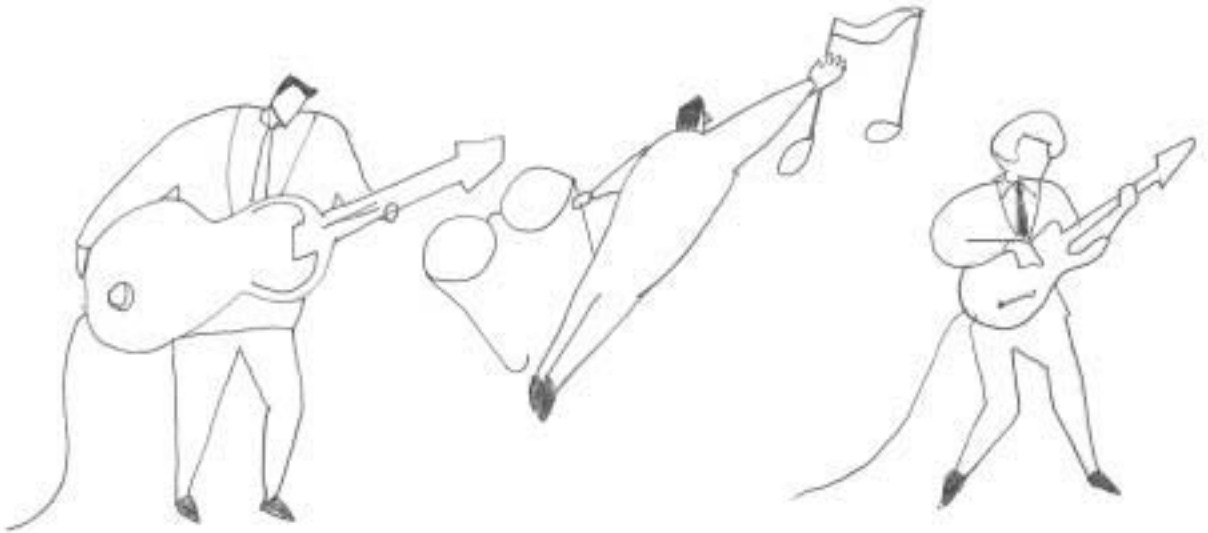
テレビ番組でも、私の学年は自分たちが子どもどきに見たのが「快傑ハリマオ」と「ナショナルキッド」であつて、「月光仮面」ではなかつたことを強く自覚している。つまり、「月光仮面」の映像がテレビに映つても「懐かしい」なんて思わないのだが、下の学年の人々は、「月光仮面」のことで懐かしがつたりして、「月光仮面」そのもので

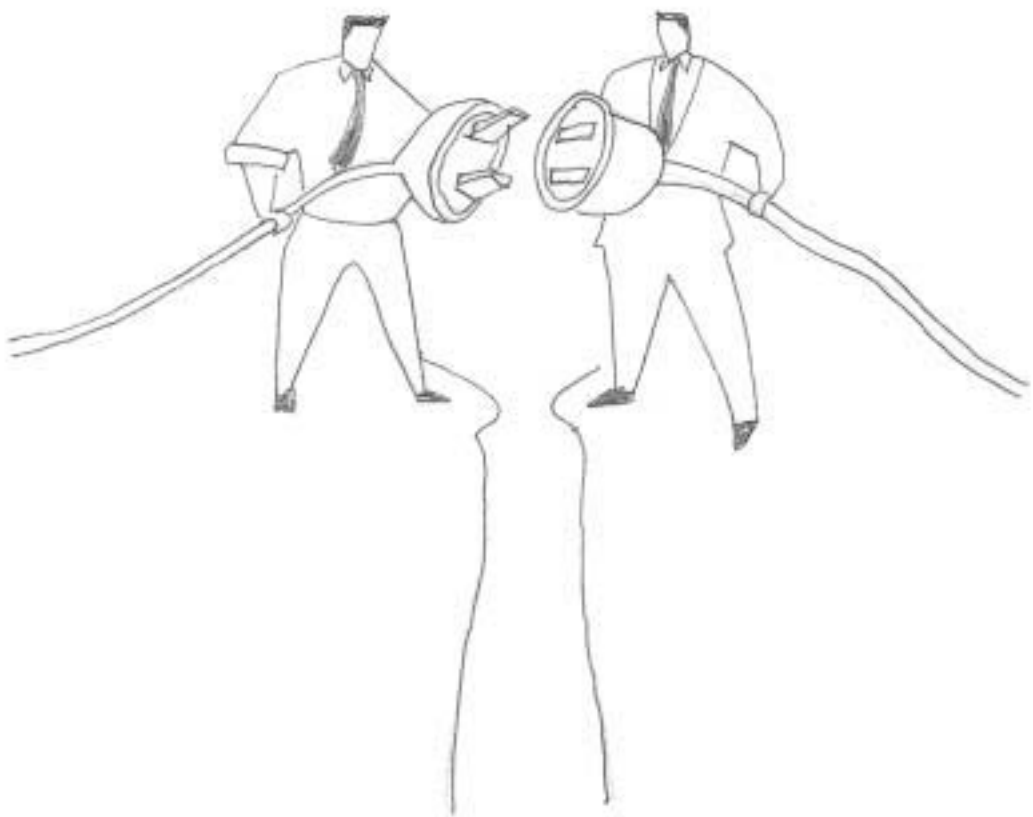
なく、「懐メロ」といふ歴史性に反応しているに違いない。

私の学年は、懐メロといふ歴史性に反応するわけではなく、自分が実際に見たといふ記憶に「たわろから」上の学年とも下の学年とも共通のLP「口」を持たない。「ウルトラマン」や「仮面ライダー」の何代目といふ差異化は、大きな流れの中での差異だから連続性があるが、「快傑ハリマオ」や「ナショナルキッド」や「マラーの使者」や「スーパーシャインマン」は孤立している。だからこれらの名前を他の世代の人々はきつと知らない。しかもともども子ども番組のLP口なんてその程度の限定されたものだろうと思つているから、小さい頃に見たテレビ番組を声高に語ることは思わない。つまりオタクになる素地がない。

音楽に話を戻すと、私の学年は本当に厄介で、大学に入ってシャスを聴くようになつたとき、「ルトレイン」はすでに死んでいて、マイルス・デイビスは休止期間に入つていた。クリーム、ジミ・ヘンク、シャニスも同時代で聴きそびれたように、「ルトレイン」もマイルスも同時代で聴きそびれてしまつたことになつた……。

団塊の世代が同時代で体験したものを「同時代で体験しそびれた」という意識を持ちつつ、彼らと同じものを聴いていた。ところが私の学年の特徴だ。もう少し遅





く生まれていけば、同時代でなく、歴史性において聴くことができたわけだが、それにもめてはまらない。実に曖昧で「ゴッー」で中途半端な位置だけれど、それは少なくとも私個人にとっては(ネガティブな意識ではない)。

人生とは本質において、だれにとっても「遅く生まれすぎたか、早く生まれたすぎたか」のどちらかしか感じられないようにできているものではないか。つまり、個人が人生において直接経験することによって大したことはないし、他人に向かって語るべきものでもない。

不確定要素の積み重ねが「自分」

人生とは自分が生きることではなくて、人によって生きられるものではないか。それも傑出した「トコ」でなく、自分のような人によって生きられる。

人が自分の代わりに生きてくれたり、自分に足りない分を人に託したり、あるいは自分はたまたまいまの仕事をしていると感じたり、人生は不確定要素だらけで、主体性を持った強い意志でいまの自分になったわけではなくて、家族や友だちの影響や、東京からの距離や学校と繁華街と自分の家の位置関係や、何歳で東京オリンピックがあつて何歳で大阪万博があつて、何歳で「クク」と出会い……など、それらいろいろ

るな力学の産物としてこうなつた。

軌轢や影響やあこがれがなかったら、いまの自分になってはいなかったらどうけれども、それらが自分を決定的に変えたわけでもない。どう表現すれば人に伝わるかわからないのだが、自分の人生においてすら、自分が当事者であることは些細なことなのだ。それは、

「わたくしといふ現象は、仮定された有機交流電燈の、ひとつの青い照明です。(あらゆる透明な幽霊の複合体) / 風景やみんなといつよに、せはしくせはしく明滅しながら、いかにもたしかにともりつづける / 因果交流電燈の、ひとつの青い照明です。 / ひかりはたまち / その電燈は失はれ」

「たまたかに記録されたこれらのけしきは、記録されたそのとほりのこのけしきで / それが無無ならば虚無自身がこのとほり / ある程度までみんなに共通します」といふ、宮沢賢治の「春と修羅」の序と通じる。私とは確固とした実体ではなく、現象なのだ。私は私を取り巻く力学の産物だから、虚無といつてしまえば虚無なのだ。

この感じは「団塊の世代」「全共闘世代」には理解されることがないだろう。「ピートルズ」や長嶋茂雄や毛沢東や三島由紀夫という圧倒的な人生の雛型とともに成長してし

まつたために、彼らは人生が自分のものであつて、人生を自分の力で切り開かなければならないと思ひ込んでいる。彼らの人生の雛型は全員共通して、社会に向かって強烈にアピールする魅力を備えていて、つねに活力にあふれていて、老いることを知らない。彼らはいつでも、自分は何者かである「と」思ふことを必要としていて、「自分の人生においてすら、自分が当事者であることは些細なことなのだ」といつ考えはつてい受け入れられない。

下の世代のオタクの人たちはどうかという「トコ」からはやっぱり人生の指針は生まれてこない。彼らと実際に話してみると、本当に驚くのだが、彼らは自分と自分の周囲と自分の育つた世界にしか関心がなく、関心の基盤がそつとつものだから、彼らのしゃべり方はなんだか世界をすべて把握できているような奇妙に知り顔のところがあつて、自分に関心があることはほかの人もみんな関心を持っていると思ひ込んでいる。だから、自分たちにとつての「トコ」が他の世代や関心を共有しない人たちにとつて、何の魅力もない人物である「と」いついつに思ひに至らない。彼らは、自分とつとつものが相対化される契機を持たないまま歳をとつていくようにしか見えな

い。彼らは現実とつれだけ関わりなく生きていっている「と」、自分は何者かである「と

いう幻想を持つたままの人生を生きてしまつた。この「トコ」は現実社会で自分が中心にいると思ひ、現にそつなのだが、オタク世代は自分中心の幻想をつつてその中で生きる。

人生に貼るラベルなんて存在しない

世代論としての「トコ」は「トコ」が自分たちの都合のためにつくり出す概念だ。しかし、困つた「トコ」にその概念によつてそれに属する本人たちまでが自己像をカク違ひしてそれに守られてしまつた。

「なになに世代」という呼称を持たずに来てしまった私の学年は、傍から見たら特徴がない。「傍から見て特徴がない」ということは、実は、本人たちも自分の特徴を知らない「トコ」となただけで、それゆえ語るべき特徴に守られず、「個人レベルの人生とは特徴がないものだし、あつたとしても大したものではない」という「真実」を抵抗なく受け入れることができる。(私のこの人生観は一貫して、新聞のインタビューで「トコ」のことを答へると、最初の頃はよく「なげやり」と書かれたものだった。マヌシは「真実」を語る場所ではなく、幻想を生産する場所なのだ)。

人生とは人からラベリングされるようなものではない。もともと人生に貼るラベルなんて存在しない。40歳を過ぎる「トコ」とつとつ

ことが実感されるようになつたはずなのだ。「トコ」に喧伝される世代に属して、その世代像通りの性格や生き方をしている人は、幻想の外に出て個としての本人の人生に出会えない「トコ」という意味では不幸だが、その幻想をまつとつてきたら幸福だともいえるだろう。

しかし「トコ」なんて無責任なもので、わかりやすく興味をひいてわかりやすく分類できさえすればいいのだから、本当のところはその世代像と一致しない人たちのほうが圧倒的に多い。その圧倒的多数の人たちは、自分が偶然にも属することになつてしまった世代像の幻想から、どつすれば自由になれるのかを知りたがつているはずなのだ。

その人たちに、「あなたのまわりにいる1956年(近辺)生まれの人を見てみな」と言いた

Kazushi Hosaka
1956年、山梨県生まれ。大学卒業後、西武百貨店でカルチャー講座を企画していた90年、『ブレンソング』(中公文庫)でデビュー。93年、退職して本格的著作活動に入り、同年『草の上の朝食』(同)で野間文芸新人賞、95年『この人の職いき』(新潮文庫)で芥川賞、97年『季節の記憶』(中公文庫)で谷崎潤一郎賞と平林たい子文学賞を受賞。ほかに『カンパセーション・ピース』(新潮社)、『残響』(中公文庫)、『猫に時間の流れる』(同)、『書きあぐねている人のための小説入門』(草思社)など著書多数。この小説は、口に入れた途端にはっきりするような味じゃない、淡々と暮らしの景色が続くのだが、食べた後いつまでも味の記憶がつかっている妙な感じだ。

団塊の老人は いかに生きるのか

三田 誠広



生まれたときから競争社会

団塊の世代の特徴で最大のものはその名の通り、人数の多い巨大な力タマリであるということだ。これは困った事態である。川に大量の水が流れればあふれて洪水を起す。人数が多いということでも、団塊の世代は社会全体に迷惑をかけてきた。小学校、中学校と、団塊の世代が成長するにつれて公立学校は教室を増やさなければなら

らなかつた都市への労働者の流入といった長期的な人口増加ではなく、団塊の世代が通り過ぎると次の世代の人数は少なくなるのでやたらと教室を増やすわけにもいかない。地下の倉庫を改造したり、校庭にフットボールを建てたりして急場をしのぐことになつたので、団塊の世代自身もつらい思いをした。

高校に入るためには入学試験がある。大学も同様である。公立も私立も、団塊の世代のために無理をして教室を増設した。これは進学率の上昇という長期的な傾向があつたから、教育機関のほうも募集人員を増やしてくれたのだがそれでも入試は難

関であそびへあつちゆる世代の中で最もよく勉強したのが団塊の世代だろう。人数が多いということも子ども頃から激しい競争社会の中を生きてきたということだ。そのフットボールの反動が、団塊の世代の独特の気風を生み出すことになる。価値観の大転換が起るのである。

団塊の世代は終戦直後の生まれだから、戦災の傷跡を記憶している。子ども頃は貧困の中で育つた。だれもが貧乏ならたわけではなく当然、貧富の差がある。高学歴への志向は、貧困からの脱出という願望から生まれたものだ。これは親からのメッセージになる。しかし高校生くらいの若者に与つては、金持ちになるために勉強するというのが発想は受け入れがたい。社会に貢献したいとか、世界平和に尽くしたいといった理念を設定して、単なるエゴイズムではないということをも自分に言い聞かせる。あそびくそこには、敗戦の記憶が関わっている。敗戦のシロクフのあとで、とくに教育分野では、民主主義や平和の理念が過剰に称えられた面がある。子どもは純粋だから、こつこつ思想をすりくり吸収してしまふ。

当時はベトナムで戦争をしていた。いまから振り返れば、連年の支援を受けた共産主義勢力からの侵略に対し、アメリカが民主主義を守るために軍隊を送り込んで防衛するというのが図式であつたのだが、ニュースな

どを見る限り、アメリカが一方的にベトナム人を虐待しているような印象を受けた。理念として語られていたアメリカの民主主義というのは、大国のエゴを押し通す帝国主義であつたり、欧米がアジアを支配し収奪する植民地主義であり、民主主義の理念とはかけ離れたものであるということが、しだいに明らかになつていく。そつこつ絶望感が、当初はベトナム反戦運動だつた学生運動を、過激化させていくことになる。

反体制運動と帰属意識

ここには二つの要素がある。厳しい受験競争をくりぬけて大学に入った団塊の世代にとって、大学の授業は魅力的なものではなかつた。大学の授業が魅力的なものではないのは、いまも昔も変わりはないのだが、受験勉強が大変だつただけに、大学に対する期待が大きかつた。その期待が裏切られる。大学で教えられるのは、古びた教養であつたり、産学協同路線に沿つた実用的な技術論であつたりして、学生たちが求める本質的な学問ではない、といった批判が学生たちの中から起つた。これもあとから振り返れば、大学といつのはそつこつこつこつのであるが、学生たちを指導する少し上の世代の人々が、過剰な理念を掲げて学生たちを挑発したのだ。

学生運動の指導者は、団塊の世代よりも

10歳くらい上の、60年安保世代だつた。この世代は子ども頃は軍国少年だつた人々である。帰属意識が強く、愛国者で、反米意識も根深く残つている。60年安保闘争そのものも、単純な反米闘争といつていい。団塊の世代の場合には、反米意識は少なくむしろアメリカのファッションや反戦フォークやヒッピー運動などに影響を受けている。しかし大学には、セフトと呼ばれる60年から生き残つているいくつかの分派組織があつて、学生たちを組み込み、それぞれに色分けされたヘルメットをかぶせて、過激な闘争に駆り立ててつた。これが第一の要素である。団塊の世代は上の世代の影響を受けて、帰属意識を植まつけられていく。

これとは別に、考慮しなければならぬのは、世界的な潮流である。ベトナム戦争は日本人から見ると、アメリカによるアジアの弾圧であつたが、そのことはアメリカ人の若者にも反省の気運をもたらした。ヨーロッパにも影響を与えた。とくにフランスではアルジェリアの紛争があり、植民地支配といつものが限界に来ていたことが露呈していた。植民地支配といつのは、道義的にも許されることではない。軍隊の派遣などで経済的にも損失が大きい。このことから、既存の社会に対する懐疑が生まれ、反体制運動が盛り上がることになつた。

当時の若者は世界的に、ジーンズをはいて

たり、インドかぶれの布をまふたり、シンプルでチープな服装をしていた。若者は総じて貧乏であるが、当時のファッションには主義主張があつた。収入に応じて立派な服装に身を固めるといふ序列を排して、だれもが平等であることが主張として、シンプルな服装を提案したのだ。ここには、大金持ちのビートルズがインドで修行をしたり、シンプルな服装を押し通すといつた実例があつた。極限なまでにチープな生き方をする。ヒッピー運動には、哲学が感じられ、それが当時のキンドでもあつた。ロックやフォークもシンプルな音楽であり、アンダーグラウンドの小劇場やテント公演の演劇も、シンプルでチープな演劇運動だつた。これは単なる貧乏ではなく、シンプルであることを善とする精神的な運動であつたと考えることができる。少しあとの世代になると、ブランドのついたファッションや、お洒落なカフェバーが好まれるようになる。シンプルでチープだといつのが団塊の世代の特徴だといつていい。

ここには、既存の社会を否定し、既存の価値観を破壊するといつ、主義主張があつた。その意味では、団塊の世代は理屈っぽくないところがあつた。同時に、ファッションや音楽にまで世代に特有の潮流があり、流れに乗つていけば大丈夫だといつ安心感があつたことも事実だ。ここには、人数が多いといつ団塊の世代の特徴が関わつてくる。人数の多い世



代がひとつの潮流をつへるとそれは経済的なメリットをもたらす標的を生み出す。団塊の世代のファッションは、商業化されて大量生産の衣料を生み出し、ロクやフォーラム、ユニコーンジックという形で音楽産業に組み込まれていくことになる。

「団塊の世代と「ゾク・ネズミ講」

もともと団塊の世代は人数が多いという理由で、商業のターゲットとなってきた。団塊の世代が小学生の頃に『少年マガジン』や『少年サンデー』などのマンガ週刊誌が創刊され、高校生の頃には『平凡パンチ』や週刊『レイボーイ』などの若者向けの週刊誌が出た。その後も『アンアン』や『ノン』『クワッサン』など、すべて団塊の世代をターゲットとした雑誌の創刊が続くことになる。若者が購入できるのは、雑誌『ファッション』くらいのものであるが、団塊の世代が就職すると、乗用車や住宅などを購入し、日本経済を支える内需の中心となる。当時は『トルシヨク』と呼ばれる通貨の切り上げや変動相場制への移行があつて、日本の輸出産業は曲がり角に差しかかつていた。終戦直後から続いていた高度経済成長もこれで終わりかと思われていた時期に、団塊の世代は内需の核となり、バブル崩壊に到るまでの間、経済成長を延命させていたのだ。逆にいえば、バブルの崩壊は、団塊の世代が

ずだ。少し目減りするだろうが、退職金や年金がまったくなくなつたわけではないのである程度の資産を手にする人が多いだろう。豪華客船で世界一周といった贅沢をせずに、青春時代にあこがれた貧乏旅行といったものをめざせば、若き日になかえられなかつた夢が実現できる。

「カルチャー老人」のススメ

江戸時代の日本人には余裕があつた。短歌、俳句、舞踊、三味線、謡曲、茶道などさまざまな遊芸が発達していた。江戸の商人たちは、生業にこしむ一方で、余暇の時間にもつひとつの生き方を求めていたのだ。俳句とか名取りといった制度は、本業のほかにもつひとつの名前を持って、芸術の世界を楽しむということを意味している。働く自分と楽しむ自分。どちらが本当の自分かと問えば、答えは明らかだろう。老後の生活というのは、本当の自分に戻るといふことなのだ。こつた遊芸の文化は、実は少ない予算で多く楽しむための生活の知恵といふこともできる。酒やギャンブルに狂えば、貯蓄はたちまち目減りしてしまふ。教養を身につけて遊芸を楽しめば、年金の範囲内で充実した生活を楽しめるし、うまくいけば、師匠になつて収入を得ることもできる。

団塊の世代といふ人数の多い世代が老後

高齢化して、内需を支えられなくなつたことが原因だと見ることもできる。

若者の頃には主義主張を持っていた団塊の世代も、やがて社会に組み込まれていくことになる。高度経済成長は、団塊の世代自身が内需を支えていたために、勢いが衰えることがなかつた。そのため企業は拡大を続けて、雇用の心配もなかつた。終身雇用で年功序列という日本企業の特徴も永遠に維持されるかに思われた。しかしそこには問題が内在されていた。年功序列が可能だったのは、多くの企業がつねに拡大を続けていたからだ。人数の多い団塊の世代が平社員になれば、人数の少ない上の世代の人々は、さして努力しなくても課長や主任になれる。賃金も増える。これは一種のネズミ講である。人数の多い新規参入者から金を搾取して、既存の人々に渡す。これを持続させるためには、企業は永遠に拡大を続けなければならない。しかし団塊の世代のあとには、世代の人数そのものが減つてしまつた。だし、内需も期待できないといふことは、最初からわかつていたことであつた。許されないのは、年金制度も団塊の世代が納付した資金を当時の高齢者に渡すといふ賦課方式に改めてしまつたことだ。年金もネズミ講方式にしてしまつたために、破綻寸前になつてしまつた。

団塊の世代が新入社員として入社した

の生活に入れば、カルチャーセンターの類が一大産業になるだろう。老人向けのサロンやライブハウスがあつてもいいし、長期滞在型のペンションがあつてもいいいきなり老人ホームといふことではなく、貯蓄を持ち、豊かな高齢者が集い、楽しむ場所が提供されなければならない。フリーターの多い貧乏な若者を相手にするより、高齢者にサービスタしたほうが、産業としても将来性がある。園芸を含めたガーデニングや、陶芸、木工、キルトや刺繍、染め物、手芸なども、単に商品販売するだけでなく、ものづくりの教室から、作つた製品を販売する場所の提供まで、豊かな高齢者の楽しむ場所がこれからは増えていく。短歌や俳句だけでなく、小説を書く高齢者もいるだろうから、自費出版の作品の流通や、文芸サークルのよつななものも増えるだろう。こつた場所の設定は、団塊の世代が自分たちで企画してつづいていくことになるが、企業や自治体の支援があれば、元気で明るい老人たちがこの国の文化を発展させていくことになるだろう。そして、老人たちが元気に生きていければ、それは若者にも希望と労働意欲を与えることになるのだ。

最後に、団塊の世代にとつて家族とは何かといふことを考えてみよう。会社の場合には定年になれば縁が切れてしまつたが、家族の関係は果てがない。その意味では、本当の

頃には、すべてがつまきつていた。当時の高齢者の人数は少なく、企業の年齢構成もピラミッド式になつていた。そういう状況の中で、団塊の世代は上司の60年安楽世代から企業への帰属意識を植えつけられた。企業といふ村社会に帰属してさえいれれば、必ず幸福になるという幻想を抱かされ、同時に商社や製造業などの大企業では、アメリカと競争することに生き甲斐を感じるようになる。団塊の世代はある意味で従順で、染まりやすい世代だともいえる。学生時代にさまざまな色のヘルメットをかぶせられ、何かに帰属することで安心感を得たり、音楽や演劇運動でも大きな潮流に乗ることでも充実感を得ていた世代である。人数が多いので団塊で行動すればそれが潮流になる。ピットタけしが言つた、赤信号みなど渡れば怖くないといふのは、まさに団塊の世代の氣質を言い当てている。だが、企業といふものは、団塊で行動するだけではいずれば破綻する。そのことは冷静に考えればわかるはずであつた。企業は無限に拡大できない。ネズミ講は必ず破綻するのである。

いま、団塊の世代は大きな困難に遭遇している。すでにリストラされた人も出ているが、企業に残っている人々も、年功序列は入ったまま、退職金も期待ほどには出ないので、はと予想されている。年金も現在の高齢者自身を求めていく過程として、家族の存在は重要である。ただし人によっては、会社での地位が上がるにつれて、家の中でも命令口調でしゃべつている場合がある。中学や高校になつた子どもにも命令口調でものを言え、ば、たちまち嫌われて相手にされなくなる。そういう関係の修復が大切である。親子は対等であるし、老いては子に従えといふ古来の教えもある。親しい友人のよつに子どもたちと交われば、年に何回か孫たちと集つてもできる。たまに会うといふのが良好な関係を持続する秘訣ではないだろうか。そういう年に数回の集いのために、自宅を改造したり、郊外の広い住居に移転したり、思いきつて別荘地に定住するのもいいだろう。団塊の世代が益暮れに郷里に帰つたように、子どもや孫の世代が集える場を提供するのが、老いた団塊の世代の務めかもしれない。

Masahiro Mita
1948年、大阪府生まれ。高校在学中に『Mの世界』(河出書房新社)で文壇にデビュー。1977年『僕って何』(河出書房新社)で芥川賞受賞。早稲田大学文学部客員教授として小説創作を担当し、若手の指導にもたずさわり、日本文芸著作権センター事務局長としても活躍。著書には、『いちご同盟』(河出書房新社)、『父親学入門』(集英社)、『中年って何?』(光文社)、『釈迦と維摩』(作品社)、『ここに効く小説の書き方』(光文社)、『団塊老人』(新潮新書)など多数。団塊世代のど真ん中にある等身大の目線から、自身のライフステージの移り変わりとともに、大学、家族、中年、老年へと、その生き方をシニカルかつユーモラスに物語る。